

| | |
|------------------|---|
| Title | 日本のバイオベンチャーの経営戦略 - 創業を目指す場合 - |
| Sub Title | |
| Author | 藤本, 秀基(Fujimoto, Hideki) 小幡, 績 |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院経営管理研究科 |
| Publication year | 2004 |
| Jtitle | |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 修士学位論文. 2004年度経営学 第1995号 連絡が必要 |
| Genre | Thesis or Dissertation |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002004-1995 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論文要旨

| | | | | | |
|---|--------|------|----------|----|-------|
| 所属ゼミ | 小幡 研究会 | 学籍番号 | 80328842 | 氏名 | 藤本 秀基 |
| (論文題名) | | | | | |
| 日本のバイオベンチャーの経営戦略 ～創薬を目指す場合～ | | | | | |
| (内容の要旨) | | | | | |
| <p>日本のバイオテクノロジーの研究レベルは世界的に見ても非常に高い。しかし、そのバイオ技術の産業への応用では欧米に大きく遅れをとってきた。しかし、日本政府も1990年代後半からバイオ産業を21世紀の国を支えるべき産業と位置づけ、法律、税制、制度や金融市場の整備、予算の増額、産官学の連携推進などマクロ環境の改善に努めてきた。</p> <p>アンジェス MG のマザーズへの上場を期にバイオベンチャー投資ヘリスクマネーも流入し、新興市場へ上場するバイオベンチャーも急増した。創薬を目指すバイオベンチャーも多数出現した。創薬は高い付加価値を生み出す大変魅力的な事業なため、投資家も高く評価し、創薬を目指すベンチャーに積極投資してきた。</p> <p>しかし、今の日本のバイオ産業を取り巻く環境下では自前シーズのみでの創薬は避けるべきである。その主な理由は株式公開前に日本で調達できる資金の額が創薬事業を発展させるには明らかに不十分であり、臨床段階に複数の開発候補品をパイプラインとして持つことが非常に困難だからである。また、日本ではアカデミーから企業へのシーズ移転のトランスレーショナルリサーチが円滑に行われていないためシーズの導入や共同研究を出来ないベンチャーはパイプラインを充実させることが出来ない。創薬において臨床段階の各フェーズにおけるパイプラインの充実は必須である。</p> <p>日本ではコンサルティングなど他の収益事業を持った上で創薬事業を行うべきである。自前にこだわらず、積極的に開発候補品の導入、共同研究を行い、パイプラインを充実させるべきである。自社のコア技術が創薬支援で導入や共同研究できる人脈がない場合は創薬のバリューチェーンを水平統合するようなアライアンスか企業買収でバリューチェーンの幅を広げて創薬を行うことが解決策になる。このような中長期の事業戦略、ポートフォリオ戦略を策定し、実行できる経営経験豊富な優れたマネジメントチームが機能することが前提条件である。今の日本の創薬を目指しているバイオベンチャーの多くはこの戦略策定を行い、実行できるマネジメントチームを欠いている事が問題である。</p> | | | | | |